

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 *Prasannapadā* 第25章の研究
氏名 王俊洪

六世紀頃の中観思想家チャンドラキールティ(Candrakīrti)の主著『プラサンナパダー』(*Prasannapadā*)は『中論』(*Mūlamadhyamakakārikā*)注釈書の中でサンスクリット完本が現存する唯一の文献である。『中論』のサンスクリット断片が発見された現在でも『中論』全体を回収する上で最も重要な資料である。また、同論はチベット仏教、特に現在最も勢力を持つゲルク派の中で、中観思想に関する権威ある文献と見なされている。そのため、チャンドラキールティの中観思想および中観派の展開を考察する上で、『プラサンナパダー』は不可欠な資料である。本研究は、四句分別・生死即涅槃・戯論寂靜などを説く『プラサンナパダー』第25章「観涅槃品」の研究である。

本論文は二部で構成される。

第I部は「研究編」である。『プラサンナパダー』第25章は主に三つの部分に分けられる。

1. 導入部(vv.1-3) : 空と涅槃
2. 涅槃の特質をめぐる批判的考察(vv.4-23) : 四句分別論法による論証
3. 戯論寂靜(v.24) : 仏の沈黙、一字不説

「導入部」において、有余依涅槃と無余依涅槃は、実在論の主張するような形では成立しえず、空性という観点から見たとき、はじめて成立すると説かれる。空性論の立場から見ると、涅槃は一切法と同様に不生不滅である。すなわち、この導入部の主旨は「生死即涅槃」にあると考えられる。vv.4-23は、「生死即涅槃」を論証している。そのために、チャンドラキールティは龍樹に多用された四句分別論法と帰謬法を用いるだけでなく、自立的な論証式をも用いて、「涅槃は存在物ではない」等の四つの主張をすべて排斥し、最終的に涅槃と輪廻にはいかなる区別も存在しないという「生死即涅槃」を論証するに至る。このような涅槃は戯論寂靜と表現され、この境地に立った仏は完全な沈黙を保つとされる。この仏の沈黙が一字不説と呼ばれる。本論文第1部「研究編」は、上述の内容を考察するために、以下の構成を取る。

第1章 『中論』の構成に関する考察

第2章 チャンドラキールティの涅槃観	2.1 有余依涅槃と無余依涅槃 2.2 生死即涅槃 2.3 戯論寂靜 2.4 無住处涅槃	}	→ 第3章 「生死即涅槃」の論証
			→ 第4章 一字不説

第5章 結論

第1章では、インドで著された比較的古い注釈書である『青目注』と『無畏論』、および漢伝仏教の僧吉蔵、本論文の研究対象であるチャンドラキールティ、さらに蔵伝仏教の学僧ツォンカパの『中論』の構成に関する理解を考察した。その結果、『青目注』と『無畏論』は「大乘の縁起＝不生不滅、小乗の縁起＝十二因縁」という解釈を基準として、『中論』の各章を大乘の教説を扱う部分と小乗を扱う部分に大別する。その結果、『青目注』は三段、『無畏論』は二段の科段に『中論』を分ける。三論宗の祖とされる吉蔵は『青目注』の科段を継承する一方、『法華経』等の經典影響の下で、三段科段をそれぞれ『法華経』にもとづいた三転法輪に配当する。それによれば、『中論』の初品からの二十五品は根本法輪、第二十六品と第二十七品の第28偈までは枝末法輪、同品末尾の2偈、すなわち『中論』全体の最後の2偈は撰末帰本法輪に割り当てられる。これら比較的初期の文献では『中論』第26章以降の内容を小乗教説とみなすが、これに対してチャンドラキールティは『十地経』・『稲竿経』等の經典の影響下に、『中論』全体の整合性を二無我に求める。チャンドラキールティの影響を受けたゲルク派の開祖であったツォンカパは、さらに二無我説を眼目として、『中論』の各章を法無我や人無私のいずれかに配当し、科段を施す。

第2章では「有余依涅槃」・「無余依涅槃」、「生死即涅槃」、「戲論寂靜」、「無住所涅槃」という四つの視点から、チャンドラキールティの涅槃観を考察した。

まず、チャンドラキールティは原始仏教以来の「有余依涅槃」と「無余依涅槃」の区別を継承するが、*upadhi* を五蘊、*upadhi* に依拠したものを *ātmasneha* と定義する。『プラサンナパダー』は第18章で、アートマンが五取蘊に依拠して施設されるものであることを説き、空性修行を通じて我執と我所執を滅することを詳しく論じる。このように、原始仏教以来の二種類の涅槃は、『プラサンナパダー』の中で、我執・我所執の煩惱と空性修行と関係づけられ、理論的な整合性が窺える。

次に、チャンドラキールティは輪廻と涅槃の両者は聖者の対象ではなく、凡夫に構想された世俗諦であると規定し、「生死即涅槃」を論じる。「戲論寂靜」について、チャンドラキールティは龍樹の『中論』本頌を踏まえて、戲論(*prapañca*)を分別の原因・煩惱・相・言語等と解釈する。その上で、彼は涅槃を一切の戲論の寂靜であると再定義し、伝統説としての「有余依涅槃」と「無余依涅槃」の価値を否定し、仏の境地は戲論寂靜であると説明する。

「無住处涅槃」は『中論』本頌に見られない涅槃観である。『中論』注釈書である『プラサンナパダー』も「無住处涅槃」を詳しくは論じていないが、これについて、チャンドラキールティは彼の独自の著作である『入中論』において詳細に論じる。同論の中で、チャンドラキールティは『法華経』の「化城喩」を挙げ、声聞・独覚に証得された有余依涅槃と無余依涅槃は単に如来が大悲にもとづいて声聞・独覚を休憩させるために設けた方便であるが、仏菩薩は衆生救済のために決してこのような涅槃に住しないという「無住处涅槃」説を唱える。この無住处涅槃の背景には、「生死即涅槃」と大乘仏教で重視された利他行の二つが見られる。

本論文の第2章に示された「生死即涅槃」と「戲論寂靜」は、いずれも『プラサンナパダー』第25章「観涅槃品」の主題である。本論文の第3章と第4章は、この二つの主題について、それぞれ個別に考察した。まず、「生死即涅槃」を論証するために、龍樹とチャンドラキールティは四句分別論法を用いる。従来の研究では、中観派の四句分別論法が矛盾律等に違反すると指摘されてきた。しかし、本論文では、「主語の指示対象が存在しない命題の真偽問題」という視点から、「涅槃」という主語の指示対象の存在を中観派が認めないため、四句分別の四つの前主張をすべて否定しても矛盾律等に違反しないことを論じた。 N は涅槃、 B は存在物(bhāva)を表示するとすると、四句分別の四つの前主張は次のように記号化できる。

$$\exists x(Nx \wedge Bx) \vee \exists x(Nx \wedge \neg Bx) \vee \exists x(Nx \wedge (Bx \wedge \neg Bx)) \vee \exists x(Nx \wedge (\forall y(\neg By \wedge \neg \neg By) \rightarrow x = y))$$

これらに対するチャンドラキールティの否定は次のようである。

$$\neg \exists x(Nx \wedge B'x) \wedge \neg \exists x(Nx \wedge \neg B'x) \wedge \neg \exists x(Nx \wedge (B'x \wedge \neg B'x)) \wedge \neg \exists x(Nx \wedge (\forall y(\neg B'y \wedge \neg \neg B'y) \rightarrow x = y))$$

前主張における存在物(bhāva)という概念は有為法と無為法を指すが、チャンドラキールティに理解された存在物(bhāva)は単に有為法だけを指す。そのため、本論文は、 B' でチャンドラキールティに理解された bhāva を表す。また、中観論者であるチャンドラキールティにとって、いかなる個物 x も実在しないので、論理式 β は矛盾律等の論理法則に違反しない。このような論法を通じて、チャンドラキールティは実体視された涅槃をすべて排斥し、大乘仏教徒は仏教徒の最高の宗教的理想としての涅槃に対しても執着すべきでなく、無限の衆生救済を放棄せずに続けるべきであると勧める。

最後に第4章では『中論』第25章の第24偈と、『プラサンナパダー』に示された一字不説の説法観を考察した。『中論』第25章の第24偈は仏の涅槃を戲論寂靜と規定し、この境地に住する仏は誰に対しても説法しないと説く。一字不説の説法観は部派仏教の時代に、仏の優れた特性の一つとして大衆部によりはじめて唱えられたと考えられている。その後、一字不説と仏の大悲による説法の事業の間の矛盾を解消するために、大乘経典『如来秘密経』は虚空説法を説くことになる。つまり、如来は実際に禪定に住して説法しないが、神通力によって虚空から声を発する、と解釈されるようになる。

それに対して、『如来秘密経』から一字不説を受け継いだ『楞伽経』は、法性仏・所流仏・変化仏という三仏説を導入し、法性仏は一字不説であるが、所流仏と変化仏は説法すると主張し、如来の説法と不説の矛盾を解消することに至った。

チャンドラキールティは『プラサンナパダー』において、四理証と八教証をもって一字不説論を説明する。理証の中では、チャンドラキールティは「相」・「空性」・「無我」・「戲論寂靜」の視点から、仏の一字不説を解釈する。教証の中では、チャンドラキールティは虚空説法を説く『如来秘密経』・『華嚴経』等の大乘経典を重視する。一方、『入中論』においては、チャンドラキールティは『如来秘密経』の虚空説法と『楞伽経』の三仏説を統合し

た理論を唱える。すなわち、仏の法身は完全に沈黙しているが、変化身・受用身・虚空から音声を発して説法すると解釈する。この理証と教証からみれば、チャンドラキールティは中観派の空思想と大乘仏教に重視された大悲や三身や菩薩の誓願等との結びつきを強く意識していることがわかる。

本論文第Ⅱ部（第6章—第10章）は『プラサンナパダー』第25章の校訂本と訳注研究である。第6章は、状態、内容がよいとされる六つのサンスクリット語写本にもとづいて作成した『プラサンナパダー』第25章の校訂本である。第7章はチベット語大蔵経論書部の五大版本（sDe dge, Co ne, Peking, sNar thang, Golden）にもとづいた『プラサンナパダー』第25章のチベット語訳の校訂本である。第8章は貝葉写本である Potala 写本の第25章の翻刻である。第9章は校訂に用いた六種の写本の中で、より重要な Oxford・Potala・Roma 三写本の字母表である。第10章は『プラサンナパダー』第25章の訳注研究である。